

[ブーケ]

bouquet



石巻市で育む文化芸術 マルホンまきあーとテラス



石巻市の公園から「マルホンまきあーとテラス」(中央右の白色の建物)を望む

「復興応援企画」として被災地の現在をお伝えする本連載の第5回は、
宮城県石巻市からお届けします。東日本大震災から10年たった2021年春、
被災地の石巻市に新たな複合文化施設「マルホンまきあーとテラス」がオープンしました。
ここには音響効果抜群の大ホールや博物館、カフェ、
研修室や創作室などさまざまなスペースがあり、市民の憩いの場になっています。
ここで勤務する松浦敏枝さんに、この施設や文化芸術に対する思いについてお話を伺いました。



松浦敏枝 (まつうら・としえ)
マルホンまきあーとテラス／公益財団法人石巻市芸術文化振興財団

宮城県石巻市生まれ。東北学院大学文学部卒業。

石巻市内にて芸術文化事業の企画・運営等に長年携わり、震災後は、東京、関西などのアーティスト、自治体、音楽事務所などからの支援を受け、市内各所でのコンサートをコーディネートする。

(公財) 石巻市芸術文化振興財団理事兼事務局長。マルホンまきあーとテラス支配人。



マルホンまきあーとテラス

石巻市複合文化施設。ホール(大ホール・小ホール)や博物館、市民ギャラリー、カフェに加え、レンタルできる研修室や活動室、和室、アトリエなどがある。広々とした1階の共有スペースにはたくさんの椅子やテーブルが置かれており、誰でも気軽に入ることができる。建築家の藤本壮介氏が設計した。

■宮城県石巻市開成1-8 (TEL 0225-98-5630) ■開館時間: 芸術文化センター9:00~22:00 博物館9:00~17:00
■休館日: 毎週月曜日 ※月曜日が祝日の場合はその翌日が休館日

被災の記憶

1階のエントランス



bouquet【ブーケ】編集部(以下、b): 東日本大震災から11年がたちましたが、当時のことをお話いただけますか。

松浦: 私は海のすぐ近くにある石巻文化センターという施設に勤務しており、そこで被災しました。3月11日の14時46分に地震があり、その約1時間後に大津波が到達した場所です。大津波警報が出たので、利用者には避難していただき、職員である私たちも避難しようと思いましたが、すぐ近くの北上川の水が既に引いている状態でした。これはむしろ、建物に残ったほうが安全ではないかと判断しました。

b: 地震が起こったとき、あのような津波になると予測しましたか。

松浦: 地震による被害は、資料棚や置いてあったものが倒れた程度で、建物に大きな損傷はなかったため、大津波は想像もしていませんでした。外に様子を見に行ったら職員から「津波が来る。すぐに上に避難して!」と言われ、職員全員で階段を上り、ふだんであれば石巻湾を見渡す展望室へ行きました。地上4~5階ほどの位置の部屋です。この場所で、津波が来るのを見ながら過ごしました。高い波が来るというよりも、どんどん海が上がってくるという印象でした。私たちもどうなるのか分からなくて、ちょっと死も覚悟したのですが、それでも私たちがいた場所より上に来ることはなく、何とか展望室の中は安心できました。しかし、下の階ではガラスが割れて津波が押し寄せましたし、最後に展望室に来た職員は、寸前のところで足を取られていたら流されてしまったのではないかと、まるで映画を見ているような被災状況でした。



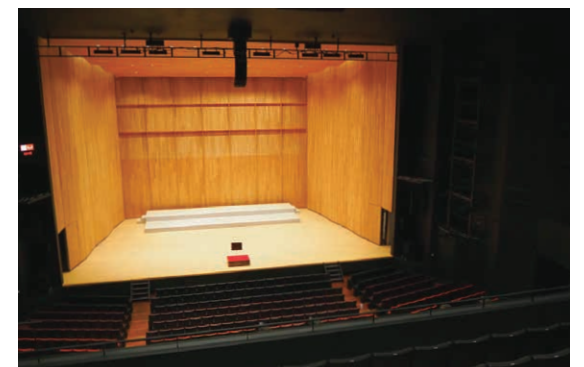
ミュージアム前の共有スペース

b: 周辺はどのような状態だったのでしょうか。

松浦: 近くの門脇小学校付近では火事も発生し、周りが燃えてしまっているのに水は張っていて、津波も引きません。文化センターは駐車場を挟んだ場所にあったので、引火することはありませんでしたが、余震が来る度に津波警報が出ましたので、私たちはそのままそこに残って過ごしました。そうして3日間は施設にいましたが、4日目の朝、お天気もよかったので、様子を見ながら外に出ました。自宅の方角は分かるので、道のないところや、人が歩いたような跡をたどって街中に出て行き、やっと家に帰り着きました。私が勤務する芸術文化振興財団は、文化センターと市民会館が勤務地になっていたのですが、どちらの職員も全員無事でした。

b: 今日に至るまでを振り返ってみて、どのような印象をおもちですか。

松浦: あっという間といえばそうだし、長いといえば長い。昨日のことにように思うこともあります。私たちの財団の事務所は当時は転々としました。なんとか乗り越えてきたかなという感じです。



大ホール(1254席)

人々の憩いの場に



誰でも入れる共有スペース



2階より撮影。全体が吹き抜けになっている

b: 震災から10年たって「マルホンまきあーとテラス」がオープンしました。特徴的な外観が目を引く、象徴的な建物ですね。

松浦: この地域の方々も最初は「何だろう、あの建物」と思ったそうです。中の構造も、非常に考えて設計されています。石巻市にはこういう建物がないので、外から見て驚かれて、入ってまた驚かれるようです。

b: 利用者はどのような方が多いのですか。

松浦: さまざまですね。子どもたちのピアノの発表会の親子連れや、高校生のサークル活動、近くの大学の学生。文化関係の活動で訪れるのは、年齢層の高い方が比較的多いです。個性的な建物なので、美術系や建築系の方、デザイナーさんや、SNSで知ったという県外の方もいらっしゃいます。

b: 幅広い層の方々が利用されているのですね。内観もとてもすてきですが、松浦さんが特にお勧めの場所はどこですか。

松浦: 大ホールのロビーは、夜になると非常に美しく見えます。大きな窓があり、明かりが反射するようにできていて、ぜひご覧いただきたい場所です。昼と異なり、夜は全く違った表情になります。通常、ホールのロビーには、一般客を入れませんよね。でもここは、公演のあるとき以外は出入り自由にしています。また、夜に外から建物を見たときの明かりの具合がとてもすてきです。

b: この施設がオープンして、多くの方が喜ばれたと思います。

松浦: 石巻市で被災された方はほんとうに多く、まずは仮設住宅、そして復興住宅での暮らし。その後学校の復旧など人々の生活が落ち着いた今、ようやくこの文化施設ができたという印象です。震災で劇場がなくなってしまいましたが、石巻市の人口を考えると、1,000席以上の劇場が必要でした。これまでの10年間、人数の集まるコンサートは、体育館にパイプ椅子を並べるなどして開催してきました。ここは、復興のシンボルともいえますので、私たちはまず市民の皆さんの期待に沿える施設にするようにと、身の引き締まる思いで施設の指定管理者となっております。

b: 利用者から寄せられたご意見の中で、印象に残っているものはありますか。

松浦: 私たちは公演鑑賞者や施設利用者からアンケートを取るなどしてご意見を伺っています。また、利用してくださる方とお話する機会もよくあるのですが、「施設を盛り上げるために私たちも何かしたい」という声も数多くありました。そこで、レセプショニスト（コンサートで受付や会場内の案内を行う係）のボランティアを募集したところ、たくさんの人数が集まりました。東京のサントリーホールでレセプショニストを務めているプロの方に来ていただいて、研修もしました。1年がたちましたが、ボランティアの皆さんは黒のパンツスーツを着て、すっかりベテランです。

b: 地域の方々も一緒に文化の場をつくっていらっしゃるのですね。

松浦: はい。それでも、今後の運営こそが重要です。文化芸術に触れたことのない方にも、ここに来てみたくなるようなことを、企画していきたいと思っています。「文化芸術」というと難しそうで行きにくいと思われがちですが、ここは市民の施設ですので、私たちもジャンルに線引きをせず、いろいろなことに挑戦したいと思っています。この施設には椅子とテーブルがたくさんあります。それは、「ぜひ来てください」という施設からのメッセージです。入館料もございませんので、用事がなくても、くつろいでいただける場所になればと思います。震災で失った「人々の集まる場所」を復活させることが願いです。

音楽や文化がもつもの

和室



b: 震災後、文化芸術などに携わる多くの方々が、それらのもつ意味を考えていると感じます。松浦さんは文化芸術、あるいは音楽について、印象に残っているエピソードはありますか。

松浦: たくさんあります。震災当時のことです。私は特にクラシックの演奏家の方々と仕事でのお付き合いが多かったので、ボランティアで演奏したいとたくさんのお電話をいただきました。私たちはホールも仕事もなくなり、片付けばかりしていたのですが、ご意向があればなるべくお連れしようと考えました。避難所だった大きな体育館では避難者の方々が生活をしていましたので、そういった場での演奏はご迷惑になるのではと思いました。そこで「ぜひ来てほしい」と言ったださる学校に行くことになりました。震災のあった年の5月頃から始まって、2011年は100件ぐらいのアウトリーチを行いました。

b: 学校で演奏会を開いたのですね。

松浦: はい。校庭に仮設住宅が建てられた沿岸部の小学校では、校長先生から「子どもたちと仮設住宅に住んでいる方の交流のために、コンサートをしてください」というお話がありました。ここでは子どもたちが、仮設住宅の方々到手書きでコンサートの案内状を作り、一軒一軒配ったそうです。入居者の方がコンサート当日にたくさん集まってくださって、音楽が交流の場になりました。

b: 音楽を中心に、人と人がつながる場が生まれたのですね。

松浦: もう一つ、別の仮設住宅でのアウトリーチです。石巻市の被災された方は、仮設住宅に抽選で入るので、お隣は知らぬ人どうし、震災前は居住地区が違う人が初めてここで会うことになります。そこでサポートしている社会福祉協議会の方々に協力を

いただき、仮設住宅の集会所にて弦楽四重奏のコンサートを実施したことがありました。演奏家の方に「こういう状況だから何人来るか分からない」とお伝えしたところ、「1人でも来れば演奏します」とおっしゃっていただき、童謡や唱歌をプログラムに入れてくださいました。

b: さまざまな地区から集まっているため、お互い誘い合うのではなく、ご自身の意思で訪れることになりますね。

松浦: 最初にいらっしゃったのは、被災してご主人を亡くし、お独りになられたというおばあさんでした。「おうちも流されちゃった」と。その後1人、2人と増え、15人ぐらい集まったところでコンサートが始まりました。童謡は、皆さん小さな声と一緒に歌うのですが、だんだん懐かしくなるのか、何かを思いながら、涙を流して聴いていました。でも悲しいというよりは、なんとなく癒やされているような、温かい雰囲気でした。最初にいらっしゃったおばあさんが、「私はクラシックは聴いたことがなかったのよ。でもクラシックっていいわね」と。演奏家の方は被災地に来ると「私たちには何もできない、音楽は何の役にも立たない」と必ずおっしゃるけれど、それは違います。みんな、最初はおながが空いて食べ物や寝る場所を探すけれど、そのうち人と話すことや音楽や文化のある生活を必ず求めるんです。演奏家さんもそのおばあさんの言葉に救われたとおっしゃっていました。忘れられない経験です。

b: 音楽に関わる全ての方が勇気付けられるお話だと感じました。

松浦: 音楽には力があります。そして、何か張りつめていたものを解き放つことができるのかもしれませんが。演奏を聴いていた皆さんは泣いたり笑ったりいろいろですが、最後は力いっぱい「ありがとう」と拍手してくださった様子を私はたくさん見てきました。そういう瞬間に立ち会えたから、私はこの仕事を辞めなかったのだと思います。この仕事の奥深いところを体験させていただきました。



大ホールのロビー。夜が特に美しい



Interview

和泉千佳子先生

石巻市立和渕小学校校長。宮城県吹奏楽連盟副会長、同石巻支部会長、宮城県連合教育研究会小学校音楽部会会長。

令和4年11月18日には、マルホンまきあーとテラスで「第58回宮城県音楽教育研究大会 石巻大会」が行われます。同施設に詳しく、研究大会の実行委員長を務めている石巻市立和渕小学校の校長 和泉千佳子先生にお話を伺いました。

b: 現在、学校現場はコロナ禍で大変だと思います。学校経営で工夫されていることはありますか？

和泉: 以前赴任していた岩沼市立岩沼南小学校では、学芸会ではなく音楽発表会を実施していました。音楽の授業で学習した曲を発表することで、学芸会の準備時間が不要になり、先生方の働き方改革にもなりました。音楽発表会では、間隔を空け、マスクとフェイスシールドを付けて歌い、配信もしました。子どもたちは歌いながら感動して、マスクは涙でぬれていました。歌うことは、心を開くことだと思います。それができないのは、かわいそうです。

b: 和渕小学校では音楽の授業に歌唱を取り入れていますか？

和泉: はい。全ては工夫次第と考え、本校では既に歌っていますし、リコーダーも演奏しています。音楽集会も行っていますよ。放送室をスタジオに変えて、校歌などを歌うときはオンラインで伝えます。各クラスのテレビに映して「皆さん、校庭側の人は校庭のほうを、廊下側の人は廊下のほうを向きましょう。真ん中の列の人は前と後ろを向ってください」と言えば、みんな別の方向を向いて歌います(笑)。「しないのではなく、何とかしてみよう」と教員ががんばることで、子どもたちも一生懸命になってくれます。コロナ禍を理由に、やめることは楽です。しかし、私たちは子どもたちを成長させなければなりません。そのためには、私たちが考えて勉強をする必要があるのです。

b: 和泉校長先生が実行委員長を務めていらっしゃる宮城県音楽教育研究大会 石巻大会の会場は、

マルホンまきあーとテラスです。オープンして1年ほどたちますが、訪れてみていかがでしたか？

和泉: 震災から11年、やっと念願のホールができました。私も地域の皆さんも、このホールができたことをたいへん喜んでます。私たちは、ずっと生の演奏を石巻で聴きたかったのです。マルホンまきあーとテラスの大ホールは、音響がとてもすばらしい。私はここでさまざまなコンサートを聴いていますが、公演によっては県外からもお客さんが来場しています。複合施設として展示室や研修室などもあるので市民もさまざまなことに利用できますし、今年は宮城県の吹奏楽コンクールの会場もここに決まっています。

b: 今回の研究大会は、どのような形で開催されるのですか？

和泉: 対面開催ですが、研究演奏は行わず、児童・生徒の作品を高校音楽科の先生方に編曲していただいて、弦楽四重奏での演奏を披露しようと思っています。今までにない新しい試みです。感染状況がどうなるのか分かりませんので、子どもたちを連れていく形での研究演奏と授業実践は控えます。また授業実践については、領域にこだわらず、先生方の扱いやすいものを提案していただくことになりました。実際の子どもの様子を思い浮かべながら、どうすればよいのかを検討し合う。それがいちばん必要なことです。「こういう方法がありますよ」と先生同士が発見し合い、つながって、音楽教育を広げることができればと思っています。今回の研究大会の主題は「つながろう音楽で ひろげよう感動を！」です。コロナ禍だからこそ、つながることができる。そういう大会にしたいと思っています。

第58回宮城県音楽教育研究大会 石巻大会

- 大会主題: つながろう音楽で ひろげよう感動を! ~思いや願いを伝え合い 表現する 授業を目指して~
- 日程: 令和4年11月18日(金) ■場所: マルホンまきあーとテラス(石巻市複合文化施設)
- 実践発表: 授業提供 小学校2学級 中学校2学級

※詳細は8月発表

上野耕平の

crossing [クロッシング]

3月16日に再び東北地方を襲った福島県沖地震。その影響で東北新幹線が長期の運休。首都圏との往来にも困難を要した。僕もその時期に東北での公演のため利用する機会があった。運休の期間、並行する東北本線を通る臨時快速列車が救済列車として走った。僕が乗った日は福島駅と仙台駅の間をこの列車を乗り継いで移動した。普段は新潟〜秋田間を結ぶ特急いなほ号として運用されている車両を使つての運行。途中、ちようど満開だった桜の名所「白石川堤一目千本桜」の目の前を通過する際には減速するサービスまで。

その後、驚異的なスピードで行われた復旧作業により新幹線運転再開。帰りは新幹線に乗車できた。東北の春と、関係する方々の復旧へ向けたただならぬ努力を噛み締め味わった鉄路の旅だった。



第13回

被災地を救う臨時快速列車

文・写真: 上野耕平(うえの・こうへい)

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第1位・特別大賞(史上最年少)。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクール第2位。17年度第28回出光音楽賞、18年第9回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に広えている。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。NHK-FM「X(かける)クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「情熱大陸」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

◇上野耕平コンサート情報はこちら。

<https://uenokohei.com/concert/>
(上野耕平オフィシャルホームページより)



編集部メモ

2022年3月16日に発生した地震の影響で東北新幹線が運休となった期間、並行する東北本線で臨時快速列車が運行された。この快速列車には、通常は羽越本線(新潟〜秋田間)を走る特急「いなほ」の車両が東北本線に“出張”して運行された。「白石川堤一目千本桜」は、蔵王連峰を背景に白石川堤に咲き誇る桜並木。ソメイヨシノを中心に1,200本以上の桜のトンネルが約8キロメートルにわたって続く。東北本線の船岡〜大河原間では、車窓からも眺めることができる。





今村信哉（いまむら・しんや）
共栄大学 客員教授

本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第12回は、大学で教員を目指す学生たちの教育に尽力する今村信哉先生が、さいたま市立蓮沼小学校でつづった学校だよりからお届けします。使用禁止になっていたブランコが、子どもたちによるルールづくりを経て復活に至るまでのお話です。また、今号では今村先生が教育現場で大切になさってきたことや、現在の活動についても伺いました。

第12回 今村信哉 先生（元 さいたま市立蓮沼小学校 校長）

ブランコ再会式

校長を務めていた頃の出来事の中で、今になっても思い出すのは、あるとき2年生の2人の女の子に「校長先生、ブランコで遊びたいんだけど、いつから使えるんですか？」と聞かれたことです。

蓮沼小学校では校庭のブランコが高学年の子どもたちに好評でしたが、その分、大きな事故が起こる可能性があるため、使用禁止としていたのです。

私も何とかしたいと思っていましたが、解決方法が見つからずにおりました。

保護者の方々からの声もあり、ブランコの使用再開を実現する方法を改めて考え、

私は子どもたち自身にルールを作ってもらうのがよいと思いました。そこで、当時の代表委員の子どもたちに「ブランコを復活させたいけれど、みんなが安全に楽しく使えるように自分たちでルールを作ってみてほしい」と1週間の期限で頼むと、代表委員会の子供たちは真剣に話し合い、使用のためのルールをつくってくれました。

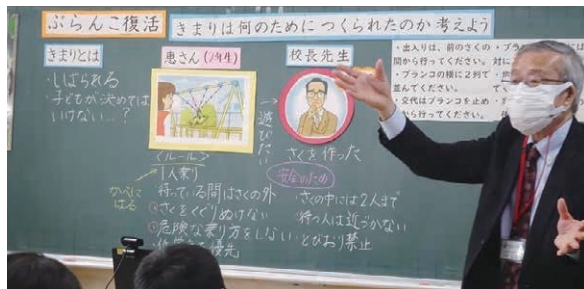
ルールの一つには「低学年優先」というものがあります。高学年に人気のあったブランコでしたから、

提案されたときに私は「無理なルールを作るのはやめたほうがいいのでは」と伝えました。

代表委員である高学年の子どもたちはさらに考えてくれましたが、それでも「低学年の子どもたちに学校は楽しい場所だと思ってほしい」「6年間通せば公平である」と同じ結論に至り、

そのルールを採用することになりました。

その後、多くの方々の協力も得ながら、蓮沼小学校では再びブランコで遊べるようになりました。



「ぶらんこ復活」（本誌P.12参照）について授業をする今村先生



ブランコ再会式



ルールを守ってブランコで遊ぶ子どもたち

ブランコ再会式

昨年の6月に行った「父親学校会*」で話題となった「ブランコ」が復活しました。

一昨年の秋から、ブランコにぶつかって怪我をする事故が多発したために安全上の問題からブランコを撤去しておりました。その後、子どもたちからも、そしてお父さん方からもブランコの復活を希望する声が出ました。そこで、安全管理について様々な角度から検討した結果、2月26日の児童会主催「ブランコ再会式」を迎えることとなったのです。

ブランコに限らず、学校にある遊具で危険を伴うものについてはどんどんなくなっています。見沼区の小学校でもブランコのある学校は数校でした。ブランコは「順番を守っての」「次ののりたいたいのことを考えて譲る」など、ルールを守り、相手のことを思いやるなどの教育的意義のある遊具です。しかし、怪我が続発するような状況では取り外さざるを得なかったのです。

「ゴジラの会」（父親学校会で発足した父親の会）会長でもあるPTA会長の長井武志氏は「何でも排除するのは簡単です。しかし、様々な立場の人が知恵や力を出し合って何とか『実現しよう』とする素晴らしさがこのブランコの再開にはあります。」とおっしゃいました。今回の再開には「父親学校会」のお父さん方の熱意、さいたま市教育委員会の力強いサポート（財政が厳しい折に柵の増設をしていただきました）、本校教職員の知恵と指導。そして、頼もしい児童会の力が正に結集したものです。特に、代表委員会の子供たちは、低学年の子どもたちが安全に楽しくブランコに乗れるように真剣にルールを考えてくれました。のり方や並び方、そして、業間**は1・2年生専用にしようなどということまで話し合ってくれたのです。

再会式の次第には「テープカット」がありました。私も児童代表と共に参加させてもらったのですが、切る対象は紅白のリボンではありませんでした。ブランコに乗ることができないように縛ってあった紐を切ったのです。紐が切られてゆらゆら揺れながらブランコは元の姿に戻りました。その時の子どもたちの笑顔は忘れることができません。たった一つの遊具が再開しただけとは思えぬ瞬間でした。

（平成20年3月「蓮沼小学校だより」より）

*学校に来ることの少ないお父さんたちが学校にどのような形で関わられるかを話し合った「学級会」の大人版。

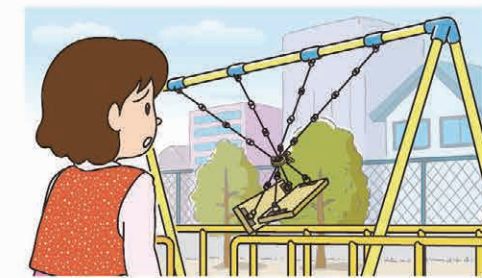
**業間休み。2時間目と3時間目の間の休み時間。

今では、みんなきまりを守り、楽しく安全にぶらんこで遊んでいます。



「待っているときは、さくの外にいますね。」
「こみ合う休み時間は、低学年の人が先に使えるようにしようよ。」
「ぶらんこをしている人がおいてから、次の人がさくの中に入るようにしよう。」

代表委員は、ぶらんこを復活させるために話し合いました。



ぶらんこ復活

恵さんの学校では、ぶらんこでけがをする人が多く、先月から使用禁止になってしまいました。
ぶらんこ遊びが大好きな恵さんは、遊べなくなってしまうのでとてもこまりました。
「校長先生、またぶらんこで遊びたいです。」
恵さんは、思い切って校長先生にお願いしてみました。
校長先生はぶらんこの周りにさくを作りましたが、まだ、心配です。
校長先生は、こう言いました。
「ぶらんこを復活させるには、けががないように使うためのルールが必要です。みんなもいっしょに考えてくれませんか。」
そこで、児童会の代表委員にも、どうすれば、けがをしないで使えるかを考えてもらうことにしました。



●学校や学級で、みんなが楽しく安全に生活するためには、どのようなきまりが必要でしょうか。

こんな場面で	こんなきまりを
こんな場面で	こんなきまりを
こんな場面で	こんなきまりを

出典：文部科学省ホームページ『わたしたちの道徳 小学校3・4年』より

「特別の教科」として道徳が先行して実施されたことは、先生方の記憶に新しいことと思います。文部科学省では教科書として使うことのできる『私たちの道徳』を製作しました。ここに紹介させていただいた教材は、『私たちの道徳』の編集委員であった私が、前述の経験をもとに、法教育として弁護士の先生と相談しながら執筆したものです。

以前の道徳は「ルールを守ろう」という考えでしたが、特別の教科となり「ルールは意義を考えたいで守ろう」に変わりました。この教材を使って様々な学校で何回も授業し、退職した現在も、蓮沼小学校で授業をしています。

蓮沼小学校でブランコのルールが決まってから、大きな事故はありません。十数年たってから1人、落ちて骨折をした子どもがいたとは聞いていますがルールを破ったわけではないとのことでした。入学した低学年の子どもたちは、高学年が自分たちを優先させてくれたことを今でも受け継いでいます。「ブランコ再会式」からずっと、子どもたちは自らルールを守っているそうです。

Interview

今村信哉先生

今村先生は大学で教鞭を執る傍ら、複数のバンドを束ねながらプロの演奏者も呼んでコンサートを企画する団体「岩槻 Jazz」の代表としても活躍されています。教育への思いや現在の活動について、お話を伺いました。



bouquet【ブーケ】編集部（以下、b）：校長を務めていらっしゃった頃、どのようなことを大切になさっていましたか？

今村：現場の先生方が仕事をしやすいよう、サポートに徹することを大切にしていました。こじれそうなことは私に対応し、先生方が働きやすいようにしてきたつもりです。「子どもたちが落ち着かないなど、何かあったら声を掛けてほしい」と伝えて、声が掛ければ教室に向かいました。クラスに私が行くと、子どもたちも校長室に来やすくなりますから。授業参観の日は、校長室に保護者や地域の方にも入っていただけるように「どうぞお入りください」と声を掛けました。校長室を常に開放し、ふだんから学校の中を把握しておく、子どもや先生が困ったとき、私もすぐに解決策を考えることができるのです。

b：学校で特に印象的だったエピソードはありますか？

今村：私が校長最後の年、さいたま市立大宮小学校でのことです。3学期の始業式に、突然クラッカーをパンパンと鳴らされたんですね。私は「何をしているんだ！」と慌てていると、くす玉が用意されてきて……。どうやら、私の誕生日が1月10日であることを知った6年生たちが始業式で誕生会をやろうと、呼びかけも含めて企画し準備してくれていたのです。最後の年だからと、手書きの卒業証書までもらいました。何だか変な動きをしているなとは思っていたのですが、私だけが知らなかったんです。子どもたちも担任たちも全員知っていたのに（笑）。

b：すてきなサプライズですね。先生が子どもたちと近い距離で接してこられた結果だと感じました。

今村：近すぎですね（笑）。不登校ぎみの子どもと、石段の上で給食を食べるなど、いろいろなことをしました。教員って、最初から校長を目指して教員になる人って多分ほとんどいないでしょう？私も気持ちはずっと教員のままです。担任マインドっていうのかな。管理職になったら職員たちの担任で、校長会の会長を務めた最後の年は、100人以上いた校長先生の担任という気持ちでした。

b：現在は、大学でのご指導だけではなく、2016年に自ら立ち上げた「岩槻 Jazz」の活動もされていますね。

今村：私自身も複数のバンドにドラムスで在籍しながら、団体としての活動を企画しています。教員の仕事もこの活動も同じ感覚で行っており、岩槻という場所にターゲットを絞って、地域に根ざした活動を目指しています。ホールをはじめ、神社やお寺、鉄道博物館、幼稚園などいろいろな場所で、通常は2か月に1回ほどコンサートを開いてきました。コロナ禍の影響で中止になった公演もありましたが、活動のペースは戻ってきています。今では月1〜2回のペースになっています（笑）。

b：先生はいつ頃からドラムスの演奏を始められたのでしょうか？

今村：高校時代ですが、真面目に演奏し始めたのは12年ほど前からです。音楽って、何といても楽しいですね。ジャズも教育も共通点は「楽しい」ということです。何でも楽しまいと絶対に長続きしません。学生たちには「楽しむ気持ちを忘れないように」と伝えていきます。「楽しむこと」これがいちばんです。

One day, ワンデー ワンモーメント one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

ヒダキトモコ

フォトグラファー。日本写真家協会(JPS)、日本舞台写真家協会(JSPPS)会員。
米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。人物写真とステージフォト
を中心に撮影。ジャケット写真、雑誌の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭の
オフィシャル・フォトグラファー。官公庁や経済界の撮影も多数。
<https://hidaki.weebly.com> Instagram: tomokohidaki_2

15 枚目

小豆島の友人

東京から小豆島へ移住した友人夫婦のもとを、2015年に訪ねた。
気持ちの良い青空の下、岩山にそびえるお寺や、歴史ある醤油蔵、
馴染みの佃煮工場さんなど、色々な場所と一緒に回りながら見せて
くれた。人柄の良い二人は東京でも多くの友達に囲まれていたが、小豆
島でも地元の祭りやお寺の早朝護摩にも参加し、島の暮らしに溶け込
んでいる様子だった。

海岸沿いの岩場を一緒に歩く。一面に広がる岩海苔の黄緑色
と、穏やかな瀬戸内海のブルーに囲まれ、足元の海藻を少し
摘んで歩く友人の後ろ姿は、まるで一枚の油絵のように思えた。
自然に比べれば人間の一生は有限。大切な年月を、どこで誰
とどんな風に生きるのか。選択肢は自分が思う以上にひろい
のかもしれない。



Contents

- 04 [連載] 復興応援企画 人とまちと、その先と ― Vol.5
石巻市で育む文化芸術～マルホンまきあーとテラス 松浦敏枝
- 09 [連載] crossing 第13回 上野耕平
- 10 [連載] 次代につなぐ 校長先生の講話 第12回 今村信哉
- 14 [連載] フォトエッセイ One day, one moment 15枚目 ヒダキトモコ

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.15をご清覧いただき、ありがとうございます。

今号は、石巻市からインタビューをお届けします。

松浦敏枝さんのお話から、音楽や芸術を大切にしたいと改めて感じました。
マルホンまきあーとテラスの美しく白い外観は、遠くからでも目を引く存在です。
これからさらに時間をかけて、この地の文化の拠点になっていくのだと思います。

「次代につなぐ 校長先生の講話」の今村信哉先生は、プライベートでは
ジャズの音楽活動を行う一面もあり、週には2～3回の練習にも足を運ばれるそうです。

取材先の大学でも、学生とも楽しげに話してお姿が印象的で、

今村先生のパワーをいただいた取材となりました。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、

心より厚く御礼申し上げます。

staff

Art Direction & Design(表紙・本文): 中澤美羽

DTP: 清新社 / 印刷: 新日本印刷

製本: ヤマナカ製本

No. 15

<https://www.kyogei.co.jp/>